コンピュータは引用表現を探せるか

——中世物語『あきぎり』における類歌検索および引用表現検索の試みを通して——

安　道　百合子

はじめに

ある作品が生み出されるとき、作者の意図の如何にかかわらず、多かれ少なかれ、それ以前の作品の影響を受けることになろう。そうした影響をコンピュータを使って探すことは可能か、ということを考え試みている。無論、探すことそのものが目的ではない。影響のありようを明らかにすることは、すなわち、作者の創作基盤を明らかにすることに通じ、ひいては、その作品が生み出されるに至った経緯を明らかにすることにつながるのではないかとの思いがあるからである。

具体的には、中世物語を題材にして、物語中の和歌の類歌および本文における引用表現を網羅的に抽出することがコンピュータによって可能か、またどのような方法が有効か、それをさぐるための模索を続けている。

すでに、物語中の和歌について、コンピュータを利用した二音一因子方式による類歌検索の試みとその有効性の一端を報告したことがある(注1)。読者が即座に思い浮かべられるような類歌の抽出については、必ずしもコンピュータ利用が有効とはいえないが、2音、3音の語彙の一致をのがさず、言い回しの一致を抽出できる点においては有効である。また、他出情報を一度に抽出できることにも利点がある。

このたびは、中世物語『あきぎり』を例に、作中和歌の類歌検索のみならず、その本文における引歌表現の検索や、先行物語からの引用表現の検索を、コンピュータを用いて行なうことが可能かどうかを試みたその一端を報告したい。

『あきぎり』は、いわゆる中世王朝物語に属する作品で、鎌倉末期から室町にかけての成立と考えられる上下二冊本である。1988年には「鎌倉時代物語集成」第一巻に収められ(注2)、1999年には「中世王朝物語全集」の第一巻としても刊行された(注3)。上巻は孤本で、山口県柳井市村上文庫所蔵、下巻は同じく村上本と、もう一本広島県厳島神社所蔵の「野坂本物語」の二本である(注4)。村上本が「あきぎり」の内題を持つことから、『あきぎり』と呼ばれているが、本来の命名かどうかはわからない。作中和歌の特徴や、本文に歌語が多用され、和歌からの連想が大

きく働いている点については、村上本を紹介された福田百合子氏による詳細な先行研究(注5)があり、「中世王朝物語全集」刊行までの間に、諸氏によって基礎的研究の成果や成立に関する論考なども複数出されている(注6)。コンピュータによる引用表現検索の試みにおいては、その有効性を確かめるべく、ある程度は、研究成果の後追いになる部分があるが、その意味でも本作での試みには意義があると考える。

なお、検索に使用したテキストは、「鎌倉時代物語集成」を用いたが、本稿に引用する場合は、読みやすさを考慮して、「中世王朝物語全集」より引用した。また、作中和歌の番号は「新編国歌大観」の歌番号によって示した。

一、所収和歌類歌検索の結果

作中和歌については、その特徴を述べた先行論文がある。福田氏は、主に、句単位での検索による類歌検索の方法によって、とくに上巻においては「類歌として指摘出来る歌は、数多くない」ということから、新たな素材との組み合わせの新味、上句下句のつながりの新味など、『あきぎり』作者が、新しい和歌表現に挑戦したところを実証的に指摘され、さらには、和歌の配列を、発想の展開に注目して論じられた(注7)。

一方、二音一因子方式による類歌抽出方法を試みると、果たして、それとは異なる結果も、見出されてくるのであった。他書所伝が一度に抽出されることや、年代にかかわりなく結果が出されるので、どの時代の作風かをさぐることにもまた有益な示唆を与えてくれるように思われる。

今回は作中和歌ごとに、類歌として抽出された和歌のうち、11ポイント以上で、発想の近似が見えるものを掲げることにする。

なお、『あきぎり』作中和歌の表記は「中世王朝物語全集」に従う。類歌は「新編国歌大観」の表記に従い、歌集名歌番号・作者・和歌の順に示す。また他出がある場合は出典をすべて／ごとに区切って同様に記すこととする。「中世王朝物語全集」に参考歌としての指摘があるものには頭に＊印を付し、これまでに指摘がないが参考歌と認めてよいと考えられるものには○印を付すこととする。

【1】 もの思ふ涙に空はかきくれて我から月もおぼろにぞ見る

○菊葉和歌集1186・実富朝臣

物おもふなみだにいとど春の夜の月もおぼろになほかすむかな

宝治百首3157・下野

物思ふなみだにふかきくれなゐを衣の色と人や見るらむ

【3】 暁の別れはいつもせしかどもかばかりつらき鳥の音はなし

＊新後拾遺和歌集 1139・知家／建保名所百首 777

暁のわかれはいつもから衣ぬれてぞかへる袖のうらなみ

＊源氏物語 135／物語二百番歌合 77／風葉和歌集 1121／無名草子 34／源氏物語歌合 21

あかつきの別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな

【4】見せばやな憂き暁の鳥の音にぬれぬれきつる袖の気色を

＊夫木和歌抄 5493・家長朝臣／千五百番歌合 2643

見せばやなあかつき露のおき別れ篠分くるあさの袖のけしきを

○為家五社百首 534

しらせばや露わけごろもたちわかれぬれぬれきぬるたびの日かずを

【5】よとともにながめわびにし月影を今ぞ憂き世に有明の空

孝範集 31

詠めわびぬ新手枕のきぬぎぬに露かけそめし有明の空

【8】数ならぬ身は浮き草にたとふれど誘ふ水だに音なかるらん

○李花和歌集（宗良親王）761

さそふ水なきにもいとど数ならぬ身をうき草のねにぞなかるれ

【9】いかがせん恋しき人の面影は池の底にもとまらざりけり

延文百首〔39 延文百〕1183／公賢集 826

おもかげのうつすかがみにとどまらばこひしき人をさてもみましを

○白河殿七百首 502 御製

形見とてみるもはかなします鏡とまらざりける人の面影

【11】あくがるる我が魂とまで見ゆるかな思ひに燃ゆる夜半の蛍は

○宝治百首 2889 為経

あくがるる我がたましひのきえやらでたえぬおもひにとぶほたるかな

○拾玉集（慈円）334

つゆの世のつひの思ひと見ゆるかなよもぎがもとにもゆる蛍は

【12】五月雨の軒の雫ともろともに流れて見ゆるわが涙かな

＊新勅撰和歌集 1063／定頼集 106／定頼集 457

さみだれののきのしづくにあらねどもうき世にふればそでぞぬれける

拾玉集 3547／千五百番歌合 2254

五月雨の軒のしづくはほととぎすなくやさ月の涙なりけり

【14】ふるさとを立ち来て見れば浅茅原いとど涙の露ぞこぼるる

○建礼門院右京大夫集 101

なさけおくことの葉ごとに身にしみて涙の露ぞいとどこぼるる

【17】忘れじと契りながらの橋なれどふみ途絶えても年は経にけり

○範宗集 513／歌合〔建暦三年八月十二日〕長柄橋

わすれじとちぎりながらのはしばしらそでよりさきにくちはてにけり

【18】見るたびに袖ぞ濡れける玉梓の言の葉ごとに露や置くらん

○続門葉和歌集 872 良殿法師

見るたびに袖ぞぬれけるなき人のかきおく法の水ぐきのあと

【19】我が恋は逢ふ瀬も知らず涙川ふみ見るたびに袖濡らしつつ

建保名所百首 940／井蛙抄 433／歌枕名寄 4762

わが恋は逢ふ夜もしらず二見方あけ暮袖に波ぞかかれる

【20】何とまた我のみ人を思ふらん袖に涙のかかる身ぞ憂き

＊風葉和歌集 763 はなのしるべのつま君

物思ふといふはなにともしらざりき袖に涙のかかるなりけり

続門葉和歌集 319

なにとまた我が身ひとつと思ふらん山田の庵は月ももりけり

【21】吹き払ふ峰の嵐にたぐへてもいとどこの世のいとはしきかな

新古今和歌集 1958・源季広

あひ見てもみねにわかるる白雲のかかるこのよのいとはしきかな

菊葉和歌集 796・入道前左大臣

○吹きはらふ峰の嵐のさそひきて麓に深くちる紅葉かな

摂政家月十首歌合 15・三位中将

○ふきはらふみねのあらしのおとすみてまつよりはるる月のかげかな

【22】もの思ふ心の草は茂けれど霜枯れわたる庭の面かな

○夫木和歌抄 13219 源師賢朝臣

物おもふこひぢや冬のほかならんこころの草は霜がれもなし

【24】日に添へて涙にまさる恋川の袖のしがらみ堰きしあへねば

新葉和歌集 703・源頼武朝臣／南朝五百番歌合 636

涙川袖のしがらみせきかねばもらさんさきに身をやしづめん

【25】寝し床も変はらぬものを敷妙のなど枕だに留まらざるらん

○むぐら 16

ねしとこもかはらぬものをなき人のなどたましひのとまらざりけん

【26】契りけんことぞくやしき今はたださらずはものを思はましやは

菊葉和歌集 1175

鶯のまだうちとけぬ忍音をきかずはものをおもはましやは

【29】思ふこと言はで空しく年を経ば谷の埋もれ木朽ち果てねとや

千載和歌集651・左京大夫顕輔／久安百首360／時代不同歌合108／定家八代抄885／八代集秀逸65／歌枕名寄6969　思へどもいはでの山に年をへてくちやはてなん谷の埋木

○寂身法師集342

おもふこといはでの山のやま人のくちぬる袖や谷の埋木

【30】種播きし行方も知らぬ撫子の花のあたりを尋ねても見よ

○基俊集171

古郷にたねまき置きし撫子の花の盛をいかにみるらん

【34】まれに来て立ち返りぬるほととぎす花橘を思ひ忘るな

壬二集（家隆）1266

郭公こぞやどりせし故郷のはなたち花に五月わするな

慈道親王集67

はつねこそよそになくともほととぎす花たちばなのやどりわするな

【37】逢ふことも今は憂しとや山川のおとづれだにも絶え果てぬらん

信生法師集136

逢ふことはさて山川のなかたえてあさきせも猶袖ぞぬれける

【38】数ならぬ憂きわれからにこりずまの浦のみるめはなほぞ恋しき

後撰和歌集865／五代集歌枕1010／歌枕名寄4263

風をいたみくゆる煙のたちいでても猶こりずまのうらぞこひしき

【44】人知れず思ふ心は秋の露身をこがらしに消え返りつつ

○拾玉集（慈円）5631

雲のうへを思ふこころはふる雪のふかき庭にもきえかへりつつ

【45】人知れず音をのみ立つる唐琴の弾く手もたゆく濡るる袖かな

○延文百首680寄鳰恋

人しれずにほの通路したにのみおもひしづみてぬるる袖かな

○実材母集127

人しれずうきをしのぶのうらみてもわれからなみにぬるる袖かな

福田氏の論考において、『あきぎり』の新味かとされた言葉続き（【1】涙に空はかきくれて、【5】夜とともにながめわびにし、など）は時代を広げても見出せないが、発想の近いもの（【4】ぬれぬれ着、【11】もゆる蛍、【44】【45】の言い回しなど）や二句にわたって同じ表現を用いている例（【18】【21】）などが少なからず見られる。中世の題詠歌や歌枕を詠みこんだ歌との類似が見出せたこと（【17】長柄橋【19】二見方【38】須磨）も興味深い。性急に成立の前後

関係に踏み込もうとは思わないが、類似の歌が一首ならず見出せることは、発想のよりどころが同時代歌壇にあったと考える一証左といえるのではないか。福田氏が歌群に着目されたのは、まさに卓見で、題詠の和歌群を思い起こさせるものである。特に下巻には、その傾向が著しく、一連の歌群を詠んだ後に物語を書き足していったかのような印象すら起こさせる。

二、引歌表現を探せるか

引歌表現というのは、物語本文や作中人物の発する言葉に、有名和歌の一部を意図的に織り込むことにより、和歌に詠みこまれた世界を想起させ、いま描き出そうとしている世界に、より説得力をもたせようとしたものである。読者が引用に気づき、その和歌世界を想起することが前提であるから、物語が創られた当初は、探すまでもなくすぐに思い浮かべられる和歌であったはずである。言わずもがなの心情を和歌の一節に担わせている場合もあるし、和歌世界の連想による相乗効果によってその場面の具象性を高める場合もある。

仮に、コンピュータによる引歌表現検索が可能だとしたら、物語成立当初は誰もが思い浮かべられる和歌であっても、現代の我々には思い浮かべられない和歌を探すことができるかもしれないという期待が高まる。ただし、その前に、類歌検索の方法を援用することで、引歌表現検索が果たして可能か否かの確認が必要である。可能なら、それは我々がある一節によって31音の和歌を思い浮かべるその決め手がどこにあるかをさぐることにも、結びつくかもしれない。

『あきぎり』には、物語本文に和歌的表現が散見するうえ、引歌と認定しうる表現も多く見られる。基礎研究もある程度進められているため、引歌表現検索が可能かどうかの確認をするには、適した作品と言えよう。

まず、類歌検索の方法を援用し、物語本文と和歌との比較を繰り返して、既に指摘済みの引歌が探し出せるか否かを確認した。物語本文を比較に使うためには、本文を比較に適したかたちに整える必要がある。具体的には、漢字は「御」と「給」を残し、それ以外は原則として仮名に置き換えた。また濁音はすべて清音にし、踊り字は当該のかなに置き換えた。さらに、短文の区切りを網羅的に取り出すべく、20音ずつずらして、40音ずつのまとまりを切り出していった。類歌検索の方法と同様、連続する音の一致によってポイント加点の方法を使うことにした。はじめに、2音一因子方式で、物語本文と「新編国歌大観」所収和歌との比較を試みた。引歌は5音ないしは7音の和歌一句のみの場合もあることから、ポイントを低く設定して抽出すると、予想されたことながら、大量のゴミ（不要データ）が多く出る結果に終わった。次に、3音、5音の一致で試みた。ポイント数も加減しながら繰り返してみると、3音8ポイント以上、5音6ポイント以上のとき、ある程度絞り込んだ状態で類歌が抽出されてくるようである。たとえば、物語の冒頭部分、

きりたちわたるあきのそら、よものこすゑもみえわかす、ものあはれなるやとのさひしさという40文字と和歌とを比較すると、3音8ポイント以上では7首が、5音では6首が抽出される。いずれでも、「きりたちわたるあきの」を含む歌4首（久安百首543・夫木和歌抄5386・10677「つぶらえのせなの霞もはるきえて霧立ちわたる秋のゆふ暮」、相模集58「いとどしくおぼつかなさやまさりなんきりたちわたる秋のしるしに」）、「こすゑもみえわかす」を含む歌1首（土御門院御集377「しるしあるみわの梢もみえわかずいづれも杉の夏のみどりに」）は同じ歌があがる。また、「みえわかすきりたちわたる」が1首（延明神主和歌24「名にしおふあかしのうらもみえわかずきりたちわたるあけぼののそら」）ある。3音の結果にはこれに、

百首歌合〔建長八年〕80

なにとなくあきのけしきのさひしきはきりたちわたるしののめのそら

が加わる。3音一致の結果のほうが発想の近似を見過ごさないようである。

物語はこの後、この「ものあはれ」な宿が、故按察使大納言の姫君が母と住む荒れた宿であることを語り、男主人公宮の三位の中将がそこを訪れる場面に続く。

光源氏の露分けけん蓬が門、思ひやられて悲しきに、秋もなかばになりぬれば、風の音、虫の声々もひまなきに、いつよりも月隈なきに、格子なども下ろさで、姫君端近くながめ給ひても、ただ父君の御こと思し忘るる時なく、月の光、風の音につけても、よろづもの悲しくて、御傍なる箏の琴を引き寄せて、少しかき鳴らし給へり。折しも、宮の三位の中将と聞こゆる人おはしけり。花の色、月の光にも、この世は憂きものとのみ思ひ給ひて、

これらの部分について、次のような歌が抽出される。

江帥集（匡房）488　かぜはやみあきもなかばになりぬればちりくることのはをのみぞまつ

唯心房集（寂然）52　風のおとも月のひかりもしかのねもとりあつめたる秋のかなしさ

建春門院中納言日記10　花のいろも月のひかりもあかざりしこの世ならでもさやにほふらん

いずれも従来の引歌指摘にはなく、また、積極的に引歌として認める必要はないかもしれない。ただし、冒頭から明らかに和歌的表現を意識した本作においては、物語本文にも和歌的発想が認められることは確かで、こうした和歌との類似を指摘することは、和歌的表現と発想が近似していること、場合によっては和歌表現から影響を受けていることを、側面から保証することになるのではないかと思うのである。

一方、従来の指摘のある引歌のうち、一句5音のみの引歌などはこの方法では抽出し得ない。ただし、引用の格助詞「と」などを伴なって慣用句的に用いられる場合はその限りではない。3音を一因子として一致を見つけるこの方法による引歌検索は、むしろ、見過ごされがちな本文のなかにひそむ和歌的表現を探しだすことに有効ではないかとの見通しを持っている。全体にわたっての引歌検索の結果について稿を改めて論じることとしたい。

三、物語取りを探せるか

次に、物語引用が検索可能かどうかの試みとして、『あきぎり』本文と『狭衣物語』本文との比較を試みた。これも基本的には和歌比較方法の援用である。『あきぎり』本文の加工と同様、『狭衣物語』本文から、20文字ずつずらして40文字ずつのまとまりを切り出していった。『狭衣』のテキストは、国文学研究資料館が提供している岩波日本古典文学大系本のテキストデータを利用した。比較音数、ポイント数を加減しつつ、試行を繰り返した結果、5音一因子、5ポイント以上の抽出がかなり有効なようである。

さて、結果のうち、最高の22ポイントの場合は次のように抽出される。

『あきぎり』

う」といふわたりを、ゆるらかにうちいだして、「みろくぼさつ」などよみ給へば、きく

『狭衣物語』

てん上」／と／い／ふ／わ／た／り／を／、／ゆ／る／ら／か／に／う／ち／い／だして、をし返し、／「／み／ろ／く／ぼさつ」と、よ

5音一致するときに最初の2音の間に／を入れさせ、重複をさけてポイント加算をさせたので、比較相手の『狭衣物語』本文には／が入れられたデータとなっている。結果は、22ポイント、19ポイント、18ポイントが各1例、16ポイント2例、15ポイント4例、14ポイント7例と続く。これらの例は、その前後の行でも、だいたい11ポイント以上の高いポイント数値を示している場合が多く、場面といっていい単位で、狭衣との類似表現が見えることがわかった。おおよそは、いわゆる「物語取り」と呼ばれる場合である。たとえば次の例。（以下、『狭衣物語』の引用本文は、大系本の底本と同類系の深川本を底本とする小学館「新編日本古典文学全集」本により、その巻数・頁数・段落番号を示す。）

『あきぎり』p22〔九〕

やうやう冬深くなるままに、木枯らし激しく、空かき曇りて、すさまじかるべき冬の月も、折柄にや、宵過ぎて出づる、月影さやかに澄みわたり、雪少し降りたるは、いみじく心細げなるに、小夜千鳥の妻恋ひわぶるも、貫之が「妹がり行けば」と詠みけんも思ひ出でられて、とばかりうちながめられても、かの寂しき宿のながめ、思ひやられて、おはして見給へば、時分かぬ深山木の小暗くもの古りたるを、尋ね寄りたるにや、四方の嵐もほかよりはもの恐ろしげに吹き迷ひてもの悲しきに、雪かきくらし降る庭の面は、人めも草も枯れのみまさりて、いとど心細きを、

『狭衣物語』① p232巻二〔一二五〕

世にすさましきものに言ひふるしたる師走の月も、見る人からにや、宵過ぎて出づる影さやかに澄みわたりて、雪少し降りたる空のけしきの冴えわたりたるは、言ひ知らず心細げなるに、小夜千鳥さへ妻呼びわたるに、貫之が「妹がり行けば」と詠みけんもうらやましくながめわびたまふに、御心もあくがれまさりて、例の御乳母子の道季ばかりを御供にて、かの宮におはしたれば、御門もしたたむる人もなきにや、見わたしたまふに、時分かぬ深山木どもの木暗うもの古りたるをたずねよるにや、四方の嵐もほかよりはもの恐ろしげに吹きまよひて、雪かきくらし降りつもる庭の面は、人目も草も枯れはてて、同じ京のうちとも見えず、心細げさもまさるに、

5音以上の一致を確認して類似と認められるのは下線部であるが、文章を読んでみれば、その前後の部分もさほどの違いはなく、この部分だけを読めば、同じ作品の異文程度に見ることすらできそうである。『あきぎり』にはこのような著しい『狭衣物語』との類似が見出せ、それは、これまでにも指摘されてきたところである。

しかしこのたび、その指摘になかった一致が見出せたのは、収穫といってよいだろう。

次の2例である。

（1）『あきぎり』p40〔二二〕

「即往転生」といふわたりを、ゆるらかにうち出だして、「弥勒菩薩」など読み給へば、聞く人の心さへ涙催す心地す。

『狭衣物語』p54巻一〔二二〕

「即往兜率天上」といふわたりをゆるらかにうち出だしつつ、押し返し「弥勒菩薩」と読み澄ましたまふ。

（2）『あきぎり』p43〔二四〕

この秋は、虫の音しげき浅茅原にのみ、泣き暮らし給ひて、昼はおのづから慰む折々もあるに、夕暮れの空霧りわたりて在処定めざる雲のたたずまひ、うらやましく見わたし給ひて、夜もすがらながめられ給ふ。

『狭衣物語』① p147巻一〔七一〕

この秋は、虫の音しげき浅茅が原に、泣き暮らしたまひて、昼はおのづから紛れたまふ、心のつまとかや言ひ古したる、夕暮の空霧りわたりて、在処定めたる雲のたたずまひも、うらやましくながめわたりたまへる。

（1）の「即往転生」（そくわうてんしやう）について全集の注は「典拠未詳」と記す。しかし、あとに「弥勒菩薩」と続くことからも、『狭衣物語』との類似は明白で、「即往兜率天上」（そくわうとそつてんしやう）と書くべきところを、誤って「そくわうてんしやう」と書いたものと考えることができよう。『あきぎり』底本には仮名で記されている。また、（2）の二重下線

部、『あきぎり』底本は「さためたる」の「た」の横に「さ」と傍書してミセケチにしてあるが、うらやましく思う対象としての雲は、明らかに「定めたる」でなければならない。前後を読むと、このあたりも『狭衣物語』からの引用であることが明らかだ。

『あきぎり』を、現在、読み解く際に意味がわからないままになっていたところが、『狭衣物語』との明らかな一致が見つかったことで、読み解くことができるのである。ただし、『あきぎり』転写時の意識となると、単なる誤りなのか、確信を持って書き換えたのか判断に迷うところではある。

そのほか、男主人公の服装の描写「象嵌の紅の単、御直衣の色いと濃きに、唐撫子の浮線綾の指貫あまりおどろおどろしきあはひ」（p33)、懐妊中の女君の描写「おほかたの御心地は、なかなかこのごろになりては、苦しくもおはしまさずながら、御身もありしにもあらずなり給ふにも」（p45)、出家を志向する男君の心中「かかる心のうちを知り給はで、世にあるべきものと思したるも、いかばかり思し惑はんなど、思ひ続けられ給ふには、また引き返しやつしがたきに、一方ならず悲しく、心は野にも山にも、今日や明日やと、あくがれ給へば」（p97）などは、著しい表現の一致が見える。いわゆる場面取りといえる箇所については、5音一因子5ポイント以上の抽出により、網羅的に抽出可能であると言えよう。ここに取り上げたのは、一部であるが、『源氏物語』との比較や、他の中世物語との比較結果と照らし合わせることにより、限りなく意図的な模倣なのか、偶然の一致なのか、また慣用句的に使い慣らされた表現なのかの弁別も、おのずから導き出せるのではないかと思う。

おわりに

以上、（1）作中和歌類歌検索の結果、（2）物語本文と「新編国歌大観」所収和歌との比較結果、（3）物語本文と先行物語本文との比較結果、の一端を示してみた。それぞれ、（1）本歌・参考歌の検索、（2）引歌表現の検索、（3）物語取りの検索、を目指す試みである。引歌表現の検索については、単純に物語本文と和歌との比較だけで結果が出てくるものとは言えない。しかし、（3）との併用によって、伝統的に引歌表現として定着してきた表現を、あるいはその定着の度合いを見定めることは可能であろう。複数の物語相互の比較を試みれば、引歌表現のうち、典拠とされた和歌にいちいち戻るまでもなく、一種の慣用表現として定着していた表現については、区別して検索することができるのではないか。また、意識無意識は別にして、いわゆる和歌的表現についてもある程度、探し出すことができそうである。物語取りに関しては、40文字の範囲を決めて比較をすると、明らかな模倣の範囲での抽出に限られる。ただし、中世物語相互に比較をすると、物語の成立順序や影響関係をさぐる手がかりを得ることも期待できよう。今まで意味がわからなかった表現が類似表現をさがすことによって読み解けるということもあるかもし

れない。今後、「鎌倉時代物語集成」のテキスト全体を対象として、次なる模索に踏み出したいと思っているところである。

＊ この報告は若手研究（B）「中世王朝物語の引用和歌典拠総覧作成とテキスト処理による物語内引歌表現検索の研究」による研究成果の一部である。

注

（1）拙稿「『夢の通ひ路物語』の成立について―『題林愚抄』の成立年次を指標にする可能性―」（梅光学院大学『論集』第40号　2007）「小夜衣の和歌表現―2音1因子方式による類歌抽出結果の検討を通して―」（『論集』第41号　2008）など。また拙著『文系のための情報処理入門』（中村康夫共著・和泉書院　2008）には、類歌検索のプログラムも紹介した。

（2）市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成　第一巻』（笠間書院　1988）

（3）福田百合子校訂訳『あきぎり　浅茅が露』（笠間書院　中世王朝物語全集1　1999）

（4）金子金次郎「野坂本物語解題」（『国文学攷』第26号　1961）福田百合子「『あきぎり』翻刻と考察　その1，2」（『山口女子大学研究報告』第8、9号　1983.1984）

（5）福田百合子「「あききり」の歌についての一考察―その一（～その四）―」（『山口女子大学研究報告』第13号～16号　1987～1990），「「あきぎり」の歌についての一考察―その五―」（『山口女子大学文學部紀要』創刊号　1991）

（6）辛島正雄「擬古物語とお伽草子の間―新出『あきぎり』物語をめぐって―」（『文学』56・1　1988）妹尾好信「『あきぎり』引歌表現考」（『広島大学文学部紀要』　第55巻　1995）

（7）注（5）に同じ。